

花七

母

Tu m'appelles la Rose
Mère la Rose
mais si tu savais
mon vrai nom
je m'effeuillerais
aussitôt.

生誕150年記念
詩人大使
ポール・クロードルと日本展

2018年5月19日[土]—7月16日[月・祝]

*同時開催：「文学の森へ 第2部 芥川龍之介から中島敦まで」

- 休館日 — 月曜日(7月16日は開館)
- 観覧料 — 一般400円(300円)、65歳以上・20歳未満及び学生200円(150円)、高校生100円、中学生以下は無料 ※()内は20名以上の団体料金
- 開館時間 — 9時30分—17時(入館は16時30分まで)
- 主催 — 県立神奈川近代文学館・公益財団法人神奈川文学振興会、ポール・クロードル生誕150年記念企画委員会
- 後援 — 在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ日本、NHK横浜放送局、FMエフエム、神奈川新聞社、tvk ●協力 — アンスティチュ・フランセ日本
- 協賛 — 東京急行電鉄、横浜高速鉄道、神奈川近代文学館を支援する会
- 広報協力 — KAAT 神奈川芸術劇場 ●助成 — 笹川日仏財団、渋沢栄一記念財団、Société Paul Claudel

横浜・山手 港の見える丘公園内

県立神奈川近代文学館

Musée préfectoral de la Littérature moderne de Kanagawa

〒231-0862 横浜市中区山手町110 電話 045-622-6666 <http://www.kanabun.or.jp> 東急東横線直通・みなとみらい線 元町・中華街駅下車6番出口から徒歩10分

詩人大使 ポール・クロードルと 日本展

L'Ambassadeur - poète Paul Claudel et le Japon
Commemoration du 150^e anniversaire de sa naissance

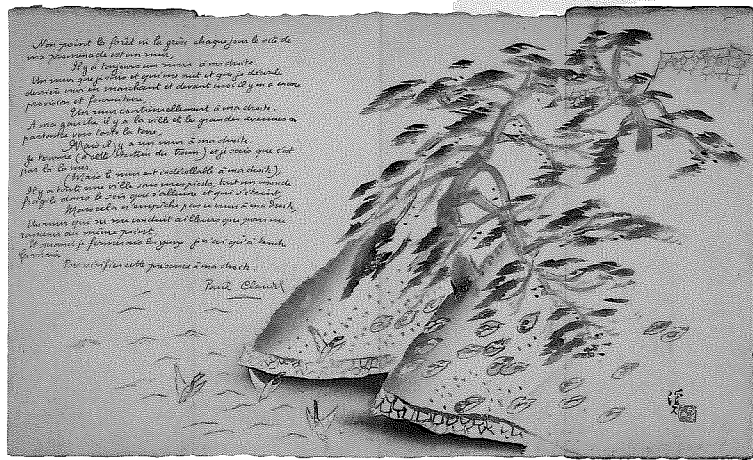
20世紀フランスを代表する劇作家、詩人であり、外交官としても世界各地で活躍したポール・クロードル(1868～1955)。1921年(大正10)から1927年(昭和2)まで駐日フランス大使を務めたクロードルは、精力的に公務にあたるかわら、日本の古典芸能や文芸、美術に親しみ、自らの創作の糧としました。そして能や歌舞伎などの影響の色濃い大作戯曲『縹子の靴』や舞踊劇『女と影』、エッセイ集『朝日の中の黒鳥』、フランス語による俳句風の短詩集『百扇帖』などを著します。さらに東京の日仏会館、京都の関西日仏学館(現アンスティチュ・フランセ関西)の開設に尽力し、日仏交流の礎を築き上げました。本展は、クロードルの生誕150年を記念し、滞日時代の文化的交流に焦点をあててその足跡を紹介するものです。



舞踊劇『女と影』関係者と 1923年(大正12)春
代々木の中村歌右衛門(五代目)邸で。後列右から8人目・クロードル。前列左から中村芝鶴(二代目)、ひとりおいて中村福助(五代目)。後列左から3人目・杵屋佐吉(四代目)、5人目・松本幸四郎(七代目)、7人目・中村歌右衛門。



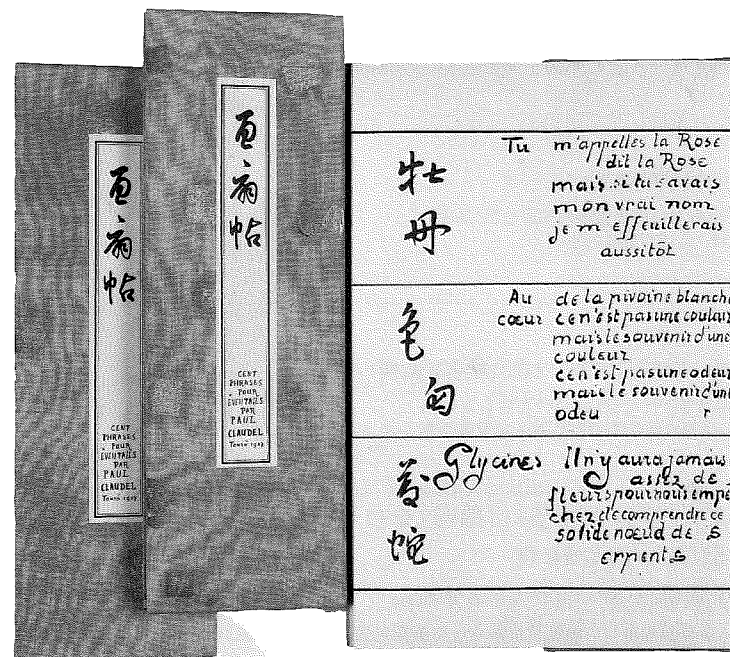
クロードル詩、富田溪仙画『四風帖』から
「大和長谷寺十一面観音」 1926年(大正15)10月 山瀧書院
日本の四季にちなむ4編の短詩に、親交のあった日本画家・
溪仙が絵を添えた合作詩画集。個人蔵



「内濠十二景」
皇居内濠の情景をうたった12編の詩の第1編。長編詩『聖女ジュヌヴィエーヴ』
(1923年(大正12)2月 新潮社刊)の表題頁の裏に刷られている。絵は富田溪仙。個人蔵



黒鳥の楽焼き
1922年(大正11)5月26日、京都・東本願寺での園遊会でクロードルが
「LE SOUVENIR FIXE L'AMITIE COMME LE FEU FIXE L'ÉCRITURE」
(火は文字の痕をとどめ思ひ出は友情をとほに留む(山内義雄訳))と筆
で書き、左右に画家・鹿子木孟郎が黒い鳥を描いたもの。クロードル
の日本名「黒鳥」の由来となったといわれる。個人蔵



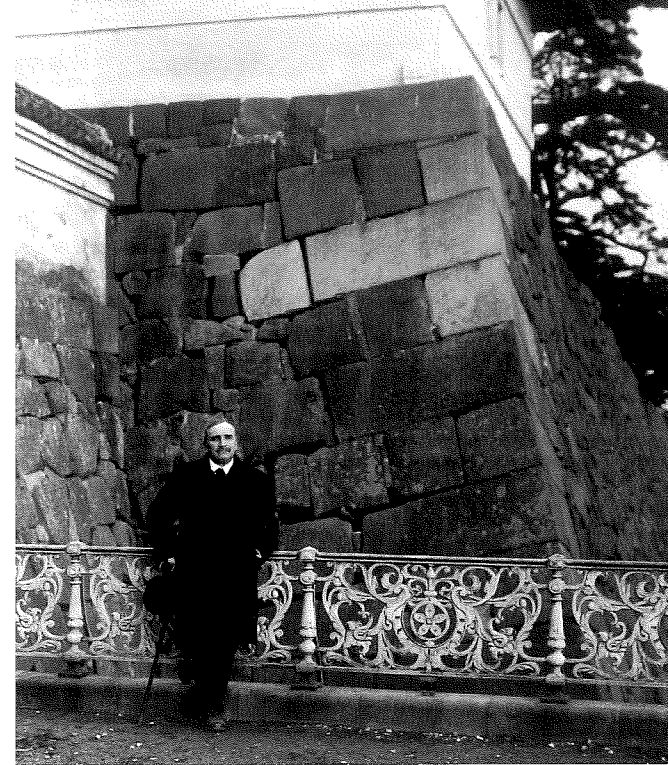
『百扇帖』
1927年(昭和2)12月 小柴印刷所 日本で作ったフランス語による俳句風短詩172句を
毛筆で書いた詩集。クロードルの依頼で仏文学者の山内義雄が吉江喬松とともに装飾的な
漢字2文字を選びだし、能書家として知られる画家・有島生馬が揮毫。経本仕立ての折本3巻
として刊行された。個人蔵



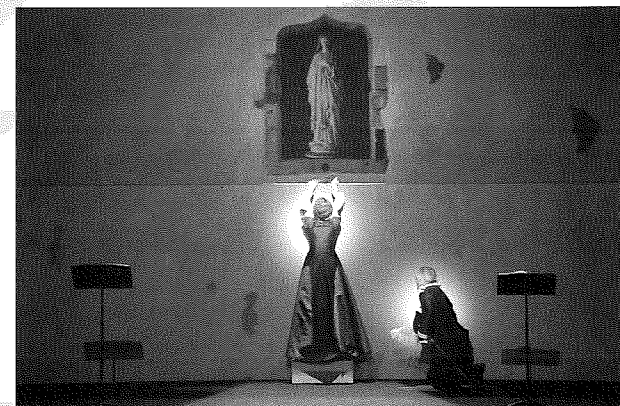
カミーユ・クロードル作 37歳のポール・クロードル像 1905年制作(2002年鑄造)
ジャポニスムを愛する姉・カミーユの影響のもと、ポールは日本への強い憧れを育てた。
アンスティチュ・フランセ日本蔵

ポール・クロードル略年譜

- 1868年(明治元) 8月6日、誕生。4歳上に姉・カミーユ。
- 1881年(明治14) 4月、彫刻家志望のカミーユの願いに従い、一家でパリに移住。
ポールはルイ＝ルグラン高等学校に入学。
- 1885年(明治18) パリ大学法学部及びパリの高等政治学専門学校に進学。
- 1886年(明治19) ランボオの『イルミニオン』[地獄の一季節]を読む衝撃を受ける。
12月25日、ノートル・ダム大聖堂で神の啓示を受ける。
- 1887年(明治20) マラルメの火曜会に通い、自作の詩をマラルメに贈る。
- 1890年(明治23) 外交官試験に首席で合格。
- 1893年(明治26) 4月、米国に赴任(～1905)。
- 1895年(明治28) 中国に赴任(～1909)。上海、福州、漢口、北京、天津で勤務。
- 1898年(明治31) 5～6月、最初の日本旅行。日光、東京、箱根、静岡、京都などを訪れる。
- 1906年(明治39) 3月15日、リヨンでレーヌ・サント＝マリー＝ペランと結婚。
- 1914年(大正3) 8月、第1次世界大戦勃発。
- 1915年(大正4) イタリアに赴任(～1916)。
- 1917年(大正6) ブラジルに赴任(～1918)。
- 1921年(大正10) 1月、駐日大使に任命され、11月19日、東京に到着。



桜田門の前で
皇居の内濠と石垣が織りなす風景を愛したクロードルは、雉子橋近くにあった
大使館を出て、内濠沿いに散歩するのを日課とした。



『縹子の靴』 翻訳、構成、演出・渡邊守章
2016年(平成28)12月、京都芸術劇場春秋座での舞台から。クロードルが日本
滞在中に完成した畢生の大作戯曲。スペインの黄金時代を背景に、大航海
時代の世界を舞台として、征服者と美しく人妻との宿命の恋を描く。
撮影・橋本正樹

- 1922年(大正11) 4月、宮中で舞楽を見る。5月、奈良、京都旅行。文案を見る。6月、帝国劇場で『忠臣蔵』
を見る。9月、舞踊劇『女と影』初稿完成。10月、能『道成寺』を見る。12月、舞踊劇『女と
影』第2稿完成。
- 1923年(大正12) 2月、『聖女ジュヌヴィエーヴ』刊行。3月、帝国劇場で舞踊劇『女と影』初演。9月、関東
大震災で大使館崩壊。戯曲『縹子の靴』第3日の草稿ほか多くの資料を失う。
- 1924年(大正13) 11月、九州各地を旅行。戯曲『縹子の靴』完成。
- 1926年(昭和元) 4月、『能』『歌舞伎』『舞楽』『文案』ほか執筆。10月、『四風帖』、11月、『雉橋集』刊行。
駐米大使に任命。12月25日、天皇崩御。
- 1927年(昭和2) 2月7日、大正天皇の大喪儀に参列。17日、横浜港から離日。8月、戯曲『クリストフ・
コロブスの書物』完成。12月、『百扇帖』刊行。『朝日の中の黒鳥』刊行。
- 1933年(昭和8) 4月、帰国。5月、ベルギーに赴任(～1935)。
- 1934年(昭和9) 12月、オラトリオ『火刑台上的ジャンヌ・ダルク』完成。
- 1935年(昭和10) 6月、帰国。外交官生活引退。この年、『オランダ絵画序説』刊行。
- 1943年(昭和18) 10月、カミーユ死去。
- 1945年(昭和20) 8月、第2次世界大戦終結。「さらば、日本!」を発表。『どどいつ』刊行。
- 1946年(昭和21) 4月、アカデミー・フランセーズ会員に選出。
- 1955年(昭和30) 2月23日、死去。28日、ノートル・ダム寺院で国葬。